

左近山団地が豊かな里山的共同体になる日 - 1

少子高齢化とともに、50年後には日本の人口が1/2~1/3に減少すると推計される現在の状況において、『里山的共同体』は豊かな緑地を保有する郊外の団地に対するコンパクトシティ化の提案です。既存の郊外の街で、既存の建物と既存のコミュニティ活動を再編し、自然にあふれた美しい緑地を保全できれば、子ども達も自然の中で育つことのできる『豊かな共同体』を実現できます。そのためには、団地内に、道、小川、溜池、農地、林・森等を再生し、住民の共有資産として、行政と共働する形で、全体の有効利用と管理を行う仕組みが必要です。その仕組みづくりの対話と活動の中から生まれるつながりが、『豊かな里山的生活』の基本となり、また、そこで再生されるつながりが非常時の支えとなります。若い人々が、希望を持てる街を、左近山団地とともに作っていきましょう。

■ 外部空間改善の考え方

1. 『水』『道』『森』の共働管理

- ・「小川」「溜池」等の水系のネットワークや畑や森の管理をより多くの住民と行政が共働する仕組みを作る。又、緑豊かにすることで、木にはたくさんの昆虫が宿り、小川にはメダカやフナが群れる。昔の子ども達がそうであったように、それらの自然を媒介に人々の間にもコミュニケーションが生まれる。
- ・里山の共働管理を通して既存の市民活動（町内会・行政・近隣学校・NPO等）を生かした再編・活性化を図る

2. 多様なコモン・輻輳する関係性

- ・団地のいたるところに、小さな広場、ベンチ、木陰を設け、いろいろな出会いの場を設け同世代、多世代の同じ趣味等の様々なつながりを生む仕掛けを設けます。

3. 前庭活用による『農園』の再生

- ・住棟の南側敷地を小区画の市民農園にし、農業経験者の指導者をおいて、賃貸で、団地や、周辺住民に利用してもらう。農園付き住宅の提案
- ・私有地の半公共的利用を進めることで里山化、共働での管理運営を実現する

4. 通路を歩行者優先とし、住棟北側には駐車場を確保する。

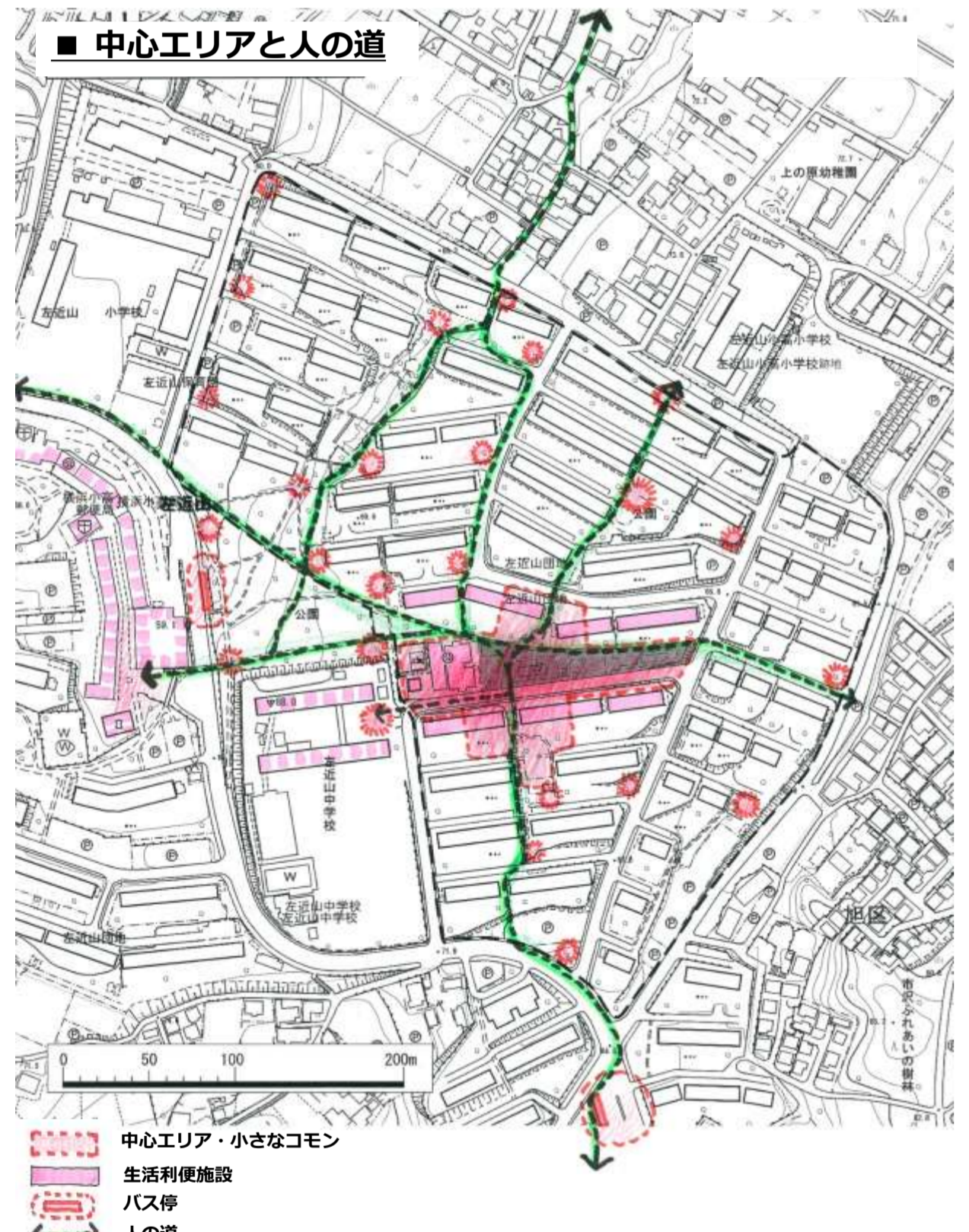
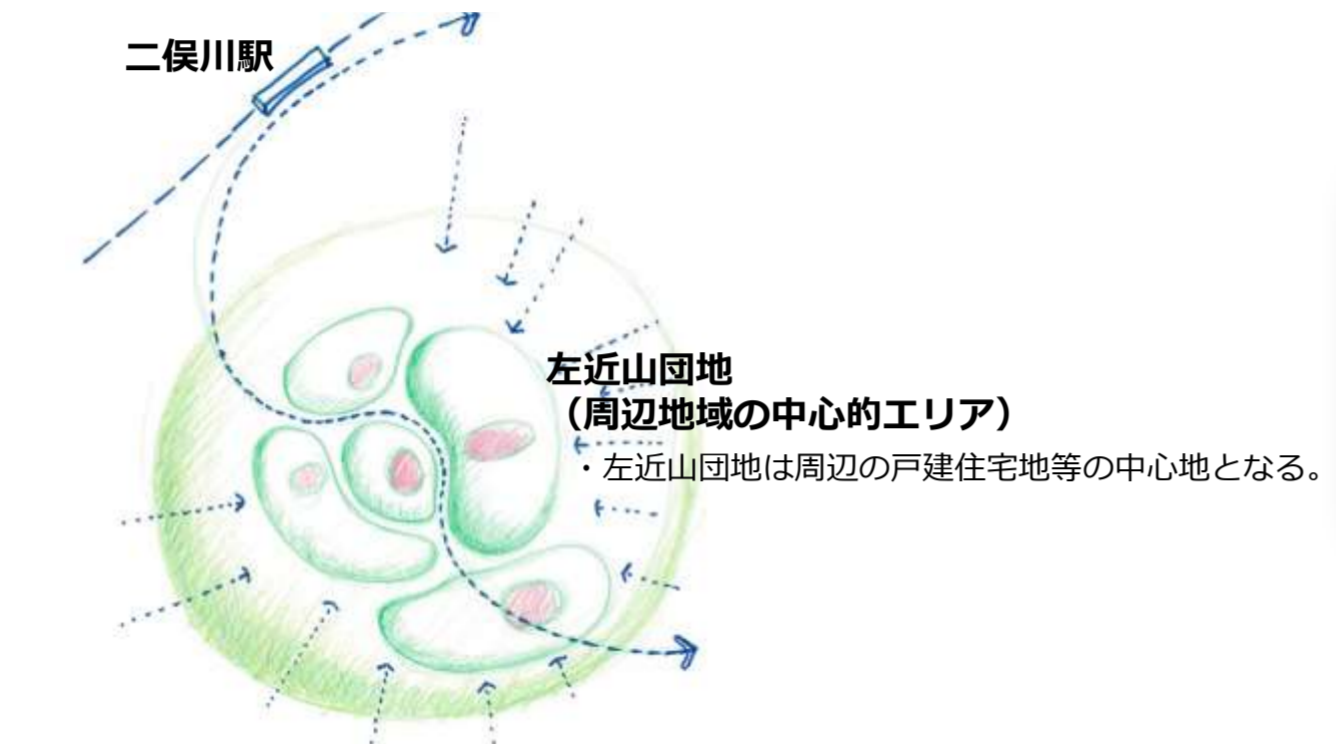
- ・通路を歩行者優先の車より遅い速度で通行可能な『道』とし、団地全体を人が自由に歩けるようにする。又、住棟の北側を駐車場にし、利便性をあげ、賃貸とすることで、団地の運営費を確保する。
- ・人の道は木チップ舗装として、ベビーカーや車いすの移動がしやすい道に整備してゆきます。

■ コミュニティ活性化に資する空き家活用のイメージ

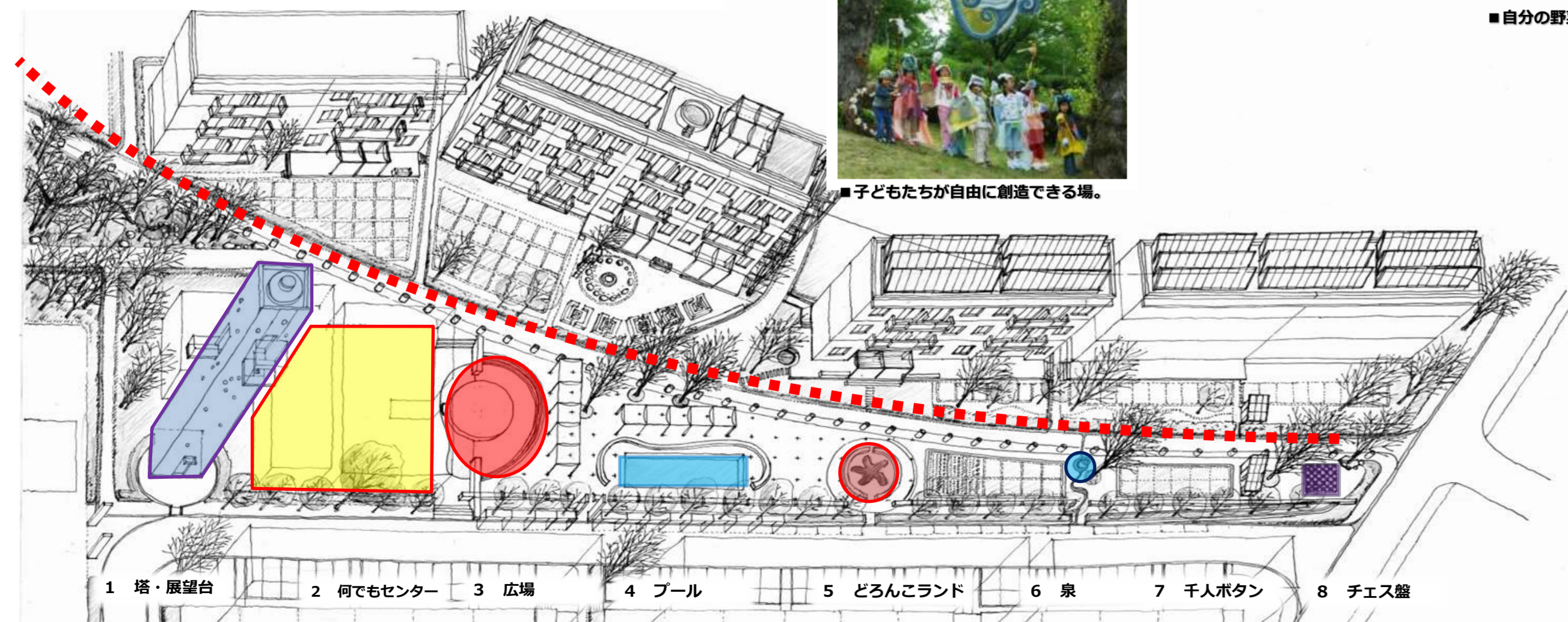
5. 既存建物の『半公共的』再利用

- ・全ての建物が半公共的利用空間（コミュニティ・カフェ、コワーキングスペース、コモンミール、シェアハウス等）を含めて再生し、可能な限りコミュニティ・ビルド（住民による手作り）で改修し、コミュニティ活動を誘発・活性化を図る

■ 広域の将来イメージ



■ 中心エリア 8つのみんなで考えるエレメント



■ 全体土地利用計画

■ 全体土地利用計画

■ 縦割り年齢で遊べること

■ 学生バンドのステージ!

■ 大きな絵が描ける空地

■ ドラム缶風呂は大人も巻き込む

■ 子どもたちが自由に創造できる場。

■ 発見できる緑地。

■ 自分の野菜が食べられる

■ 子どもたちが自由に創造できる場。

■ 泥んこ遊びができる庭。

■ カブトムシ等、虫取りができる庭。

■ ウォーターライダー

■ 住民の前で演奏会

■ 泥んこ遊びができる庭。

■ 市民農園

■ 緑地

■ 泉

■ 小川

■ 市民農園

004-①

左近山団地が豊かな里山的共同体になる日 - 2

■ I 期整備地区の整備計画

1. 広域との連携、活動、居住の拠点として。

・現在の左近山団地は、二俣川駅を中心とする広域の1拠点としてあるが、将来的には、インフラの整った緑豊かな団地として、周辺の住民も取り込む可能性のある場所を目指してゆく。

ここで言うインフラとは、

- ・図書室・保育・子育て支援スペース・アトリエ・キッチン・フリースクール・障がい者支援センター・小規模多機能住宅介護支援・デイケアスペース、シェアハウス等の様々な機能を併せ持ったコミュニティカフェ的な、多世代を対象とした多種・多様な活動・支援を行う拠点です。その他、
- ・生活利便施設：診療所・コンビニ・郵便ポスト・CDコーナー・行政出張所・レンタル倉庫
- ・日常娯楽施設：露天風呂・空中茶室・屋上ビアガーデン・銭湯・ギャラリー・バー・ゲストルーム
- ・エネルギーセンター・小規模バイオマス・コンポスト・ゴミ置場・防火水槽・雨水槽・備蓄庫
- ・公園・ひろば・森・小川・池・畑・農機具倉庫・水車等、を必要に応じて設ける

2. センター地区のコミュニティーカフェで想定されるシナリオ。

■シナリオ1

この団地に転入してきた、A子さん30代女性（サラリーマンの夫、子ども 2歳と5歳）の生活。朝、夫を送り出した後、子どもたちを連れて、住棟前の畑へ「出勤」草取りをしながら、隣の畑のBさん、(70代男性 一人暮らし)と、野菜の出来を褒め合い、出荷の準備。子どもたちは、ミミズの観察に余念がない。できた野菜は、友だちのコミカフェでも買い取ってくれる。ランチは、その対価になったりする。安全で新鮮な野菜で作られた、ランチは、近隣住民にも喜ばれている。一人暮らしの食堂としても、人が集まる場所は、声を交わし合い、お互いを助け合う場となっている。

■シナリオ2

団地が建設当時から住んでいる、Bさん70代一人暮らし男性。最近、センター地区に行くのが楽しみになってきた。「千人ボタン」を一つ必ず押してみる。団地のどこかで、誰かとつながる。「Bさんおはよう、今日も元気そうですね。あとで、3号棟のCさんと畑でとれたお味噌焼きましよう」といったことが、次々起こる。だから、Aさんの畑の草も、時々抜いてあげる。

■シナリオ3

3号棟のCさん20代は、フリーランスのカメラマン。空き室をスタジオとしても借りている。左近山団地の緑が気に入って、暮らし始めたが、新しいコミュニティーがいろいろできてきているのが、新鮮で楽しい。今日は、以前から話を聞いてみたかった、左近山団地ができたころの話を、焼き芋をしながら、Bさんに聞ける。

3. センター地区のデザインコンセプト

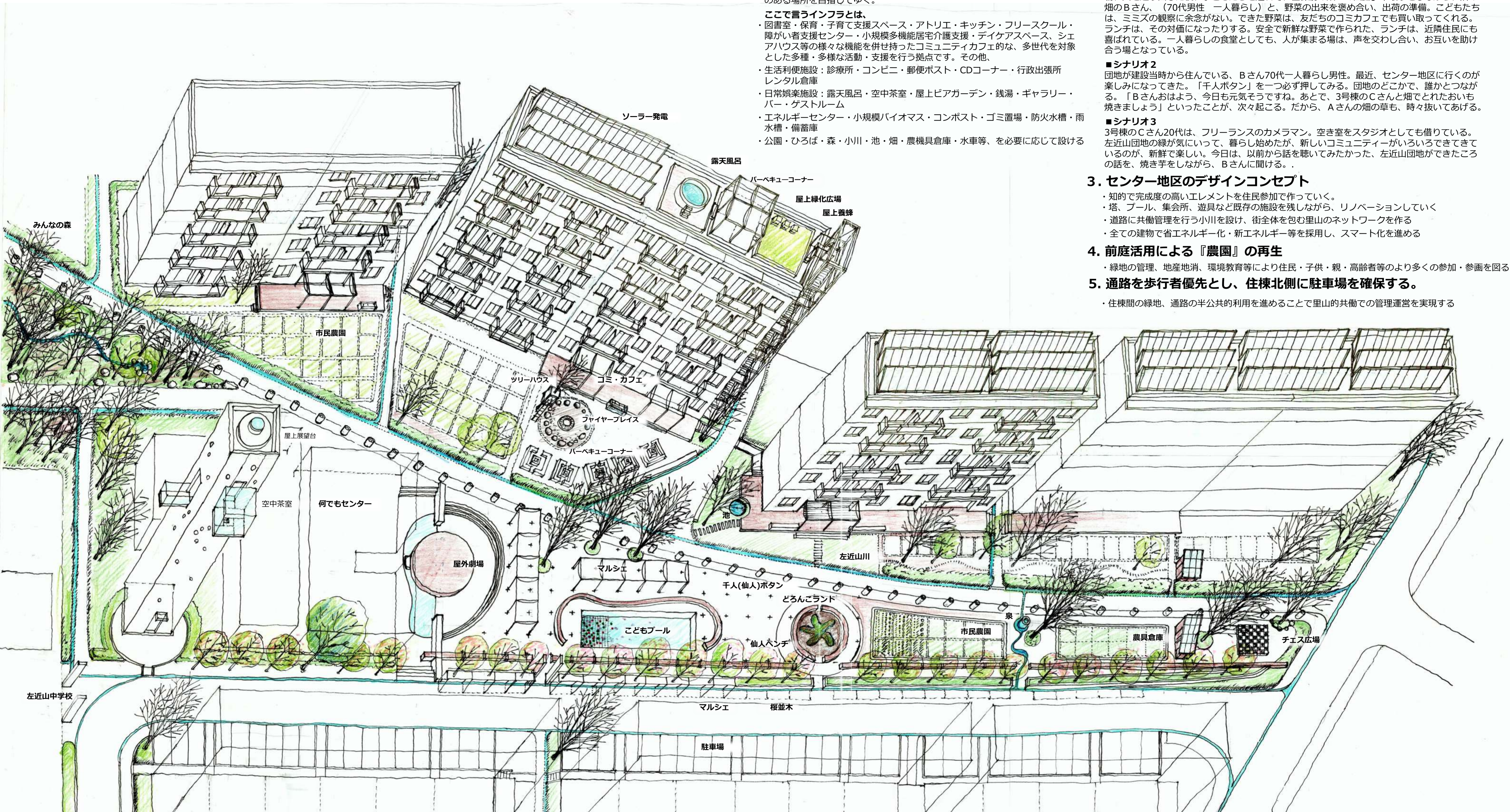
- ・知的で完成度の高いエレメントを住民参加で作っていく。
- ・塔、プール、集会所、遊具など既存の施設を残しながら、リノベーションしていく
- ・道路に共働管理を行う小川を設け、街全体を包む里山のネットワークを作る
- ・全ての建物で省エネルギー化・新エネルギー等を採用し、スマート化を進める

4. 前庭活用による『農園』の再生

- ・緑地の管理、地産地消、環境教育等により住民・子供・親・高齢者等のより多くの参加・参画を図る

5. 通路を歩行者優先とし、住棟北側に駐車場を確保する。

- ・住棟間の緑地、通路の半公共的利用を進めることで里山の共働での管理運営を実現する



■ 屋外広場 (アンフィシアター)

高低差を利用した、ステージや、水遊びのできる池を配置、イベント、住民の発表の場を作る。地域のセンターとなる施設

■ マルシェ

定期開催されるマルシェ (市場) では、畑で収穫された野菜、住民の手作り品、惣菜、スイーツ、フリーマーケット、子どもの店、など、多様な生産品が、近隣住民と、団地住人の出合いの場を作る。また、小さな仕事を作る。

■ どんごらんど

既存のサークルを残し、住民の記憶に残る遊び場とする。お父さんや、おばあちゃんが遊んだ場所、孫が遊ぶ光景は、どの世代にとっても豊かな資産となる。

■ 市民農園

住棟間の緑地は農園として、団地住民、近隣住民に貸出し、団地の運営費の資源とする。農園を交流の場とする仕組みを整え、多世代の出会いを誘発する。農園でとれる野菜は、直売所で売ることでも、小さな経済をまわす。

■ 野菜直売

畑でとれる野菜は、カフェや、惣菜屋などで消費し、将来のコミュニティの自立にも備える。

■ 千人ベンチ・千人ボタン

団地の住人が、このセンター地区にたくさん集ってほしいという願いを込めて、千人のためのベンチを住民の手によりつくる。また、千人ボタンは、そのスイッチを入れることで、団地の何か小さな変化を起こす装置とする。「変化」の内容は、住民の対話で決めていく。高齢化が進む町では、みんなが仙人 (千人) のようにゆっくりと成熟を目指す。

■ 泉

左近山川の源流として、雨水利用の泉を設置、子どもの遊び場、非常時の防災井戸、泥付きの野菜を洗うなどといった利用で、人が集まるコミュニティの「泉」となる。

■ チェス広場

縁将棋のように、みんなが見守る中での公園チェス。多世代、多国籍な交流の場が作られる。

■ 桜並木

住んで、手植する桜並木。季節ごとに、イベントや、花見の中心となる。夜桜も楽しい。

■ 屋上展望台

給水塔の上に、タラップで上がる展望台を設ける。住民にとっては、秘密の場所。特別な「千人ボタン」が押されたときにだけ、上げられる。このような、特別な場所がちりばめられた左近山団地を、住民が再発見する。

■ 団地養蜂

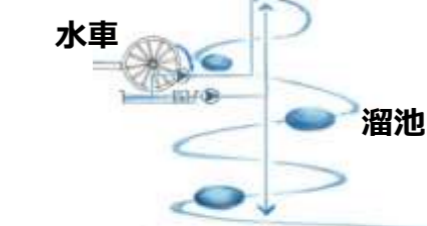
団地の陸屋根を利用した、都市養蜂に、住民主体で取り組む。採れたちみつによる、スイーツ開発など、オリジナルな商品開発にもつながる。

■ ヤギ・ニワトリの飼育

住棟間の畑では、ヤギ、ニワトリなどの家畜の飼育も可能となる。

■ 左近山川

街の中には山から流れる水を利用して生活用水とすると共に水車に利用する等、カスケード利用しながら上層から下層へ流す。街を流れる小川に、水系を共働管理することで緩やかなコミュニティが



■ ソーラーシステム

エネルギーの自立化を目指し、①太陽光発電 ②ゴミ再生施設の排熱利用及び発電 ③燃料電池 ④コジェネによる発電及び排熱利用 ⑤水力発電 ⑥下水処理施設から出る堆肥によるバイオマス発電 ⑦風力発電等を整備する。同時に周囲とのインフラネットワークを再編し、非常時の授受を可能とする

